富士山かぐや姫ミュージアム
Mt.Fuji and Princess Kaguya Museum

赫夜 ―かぐや―

博物館だより
2021 8.31
78号

愛鷹山には、古くから多くの人々がくらしていました。その人々は、厳しい環境を生き抜くために、様々な手段や技術を取り入れて生活していました。

愛鷹山のもっとも古い富士市内の遺跡は、古木戸B遺跡で、３万１千年前頃の旧石器時代まで遡ります。気温が低く寒暖差が激しかった旧石器時代において、愛鷹山は比較的温暖で、気温の変化がゆるやかであったといわれ、狩猟や採集をしながら住む場所を変えて生活するこの時代の人々にとって、生活に適した環境でした。

縄文時代になると、人々は特定の場所に定住するようになります。旧石器時代の集落は山間部に作られましたが、縄文時代前期頃（約8000年前）になると山間部だけでなく、当時海とつながっていた浮島地域周辺にも集落が作られるようになりました。このことから狩猟や採集に加え、漁撈も盛んに行われていたことが想像されます。

弥生時代は、稲を育てて米を生産し食糧を確保する農耕社会に変化していった時代といわれています。愛鷹山周辺では、雌鹿塚遺跡（沼津市）の木製農耕具の出土から、弥生時代後期に水田農耕が伝わってきたことが分かっています。また農耕以外にもガラスや青銅製品・鉄製品なども伝わりました。生活の変化は土器の形にも表れ、縄文土器よりも実用性の高い台付甕などといった多種多様な土器が作られるようになりました。

古墳時代に入ると、愛鷹山にも大型古墳が築かれますが、ある時期になると大型古墳が少なくなります。これには富士山噴火が影響しているとする説があります。古墳時代後期に入ると新たに多数の小型古墳が築かれるようになりました。小型古墳の被葬者は当時最先端の渡来系技術者とも関わりが深い人物で、富士山の噴火によって荒廃した土地を開き、のちの律令社会の礎を築きました。

本展示会では、静岡県東部の皆さんにとって身近な山である愛鷹山に焦点をあて、そこに生きた旧石器時代から奈良時代の人々の生存戦略を、発掘された資料から紹介します。

（成瀬陽介）

春のテーマ展

無病息災　悪病退散

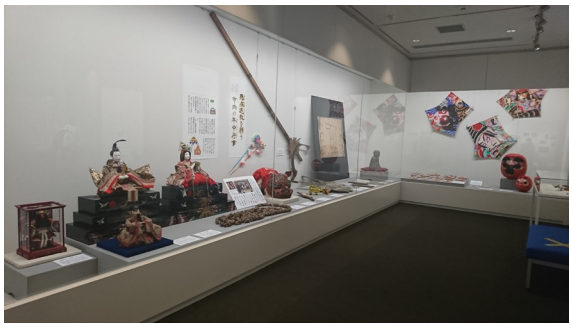
―伝承される祈りと祓い―　調査報告

（展示期間：令和３年６月１２日～９月５日）

昨今のコロナ禍において、人の生活は一変し、社会は大きく混乱しました。早急な科学的解決策が求められる一方で、SNSなどを通じて、「アマビエ」という妖怪が厄除けの象徴として注目されました。

人の力ではどうしようもないとき、古来日本人は、神仏に祈り、救いを求めることで、襲い掛かる病を克服しようとしてきました。

本展示会では、恐ろしい病気に対して人々がどのようなものに祈りを捧げてきたのかに着眼し、厄除けや無病息災を願うアイテムやシンボル、祭りや慣習など、古代から近現代までのものを幅広く紹介しました。



展示風景

「アマビエ」に見る疫病流行の背景

その奇妙でどこか間の抜けた風貌が、親しみやすく話題を集めたアマビエですが、そもそもどんな内容で厄除けのシンボルとなったのか、意外と知られていないのではないでしょうか。

アマビエは、弘化3年(1846)、肥後国(熊本県)の海中に現れ、6年の豊作と、疫病の流行を予言しました。そして、自身の姿を描き写し、人に見せれば病気にかからないと言って海に消えました。そのときのことを描いたものが江戸に伝わったということで、瓦版として広まったようです。

なんとも荒唐無稽な内容に思えますが、コロナ禍で話題になったことで、全国各地でも同様の伝承を持つものがあることがわかりました。

愛知県西尾市から、「姫魚」という人面魚のような絵の瓦版が紹介されました。文政年間(1818～1829)に平戸(長崎県)の海中から出現し、豊作と「コロリ」という病気を予言し、自らを龍神の使いと名乗って、同じく姿絵を掲げることで病気にかからないことを謳ったものです。

神池姫図（勝呂六実氏蔵）

静岡県内でも、戸田村(沼津市戸田)の名主を務めた旧家から「神池姫」という絵が見つかっています。文政2年(1819)に平戸に出現し、豊作と「三日コロリ」を予言し、帝釈天の使いを名乗って、疫病除けに絵を飾るよう言ったとするものです。

この3点の資料には、共通する内容はいくつか挙げられますが、特に注目したいのは、現れた場所と時期が、いずれも19世紀前期の九州西岸ということです。鎖国政策下の江戸時代に、唯一海外と交流していた出島は長崎にあり、19世紀前期は、海外発の疫病(チフス、コレラ)等が九州を中心に流行し、多くの死者を出しました。その後、主要街道を通って大阪や江戸に至るほど大規模な感染拡大を見せました。予言という体でこの時期にアマビエが九州西岸に現れたとするのは、こうした時代背景に起因していると考えられるのです。単に厄除けという意味では、他にも様々な神仏が信仰されていましたが、これまでに無い海外由来の病気に対抗するため、人々が祈りを捧げるのに、アマビエのような新たなシンボルの登場が必要だったのではないでしょうか。

それは、今回のコロナ禍も同様で、突如現れた海外由来の感染症に対し、これまでにない(忘れられていた)アマビエという“新キャラ”に、人々は病気平癒を期待し共感したため、大きな発信力を持ったのだと考えます。時代や環境が異なっても、こうした緊迫した状況下での人々の発想に大きな違いはなく、何かに心の安寧を求めている様子が見てとれるのです。

子どもの健康を願うアイテム

現代のような科学的な医療技術がほとんど無い時代、病を患うことは、常に死と隣り合わせでした。特に免疫力の低い乳幼児が病気で命を落とすことは珍しくなく、そんな子どもの健康な成長を願って、祈りやまじないを込めたモノを祀ったり贈答したりしました。

ダルマは、禅宗の祖・達磨大師をモデルにしたもの

で、起き上がりこぼしの構造をした張り子が多く、赤い体をしたものが一般的です。ダルマの赤は、疱瘡除けとして、古くから信じられ、子どもが健やかに育つよう願いを込めた玩具でした。商売繁盛や大願成就の縁起物としても流通し、富士市内では毘沙門天大祭においてダルマ市が立ち、特にこの地域で製作されるものを「鈴川ダルマ」といいました。

3月3日の桃の節供では、雛人形が飾られます。女の子の健やかな成長を願って、誕生の祝いに親族などから贈られました。内裏雛を中心に、七段飾りや御殿飾りなど豪勢なものも昭和期には流行しました。それらと同時に、富士市をはじめとする静岡県の一部の地域においては、この桃の節供に、天神雛(菅原道真)を飾る家があります。これは、男児用とされ、男の子の誕生祝いに贈られました。これには、怨霊となって災厄をもたらすことのないよう天神を祀ることで厄除けを期待する考えが、理由の一つと考えられますが、現状からはそうした意識はなく伝承されています。天神雛の風習は、明治末期に市内吉原に在住していた山中共古が記録した「吉居雑話」にも収録されており、全国的にも珍しいものです。しかし、なぜこのような風習が根付いたのか、また天神雛を五月節供に飾るという家もあり、天神雛については不明な点も多く、今後の研究課題です。

無病息災・悪病退散を願う伝統行事

地域で行われる伝統行事には、厄除けを願うものが多くあります。富士市内で特に盛んなのは、どんどん焼きと、お天王さんが代表的です。

どんどん焼き、どんど焼きなどと呼ばれる行事は、全国的にもよく行われる小正月の行事で、地域住民の正月飾りを集めて燃します。市内では、この火で団子を焼いて食べると風邪をひかないと言われます。

富士川以東では、道祖神がどんどん焼き行事に関わる地域が見られます。神戸や石井の町内では、路傍にたたずむ道祖神を囲うように、持ち寄られた正月飾りを使って小屋を組んで、焼くまでの数日間祀ります。柏原の町内では、かつては道祖神をどんどん焼きの会場の浜へ持っていき、これをそのままどんどん焼きの火とともに焼いてしまいます。そして、住民たちはちぎった団子を、道祖神の体に擦り付けて、元の場所に戻します。こうすることで、一年の厄を焼き払い健康を祈ります。道祖神は、ムラに厄災が侵入するのを防ぐ御利益が期待され、ムラ境の道辻に祀られました。こうした道祖神の性質が、どんどん焼き行事と結びついたようです。

柏原のどんどん焼き（平成12年撮影）

夏にはお天王さんが市内各地で実施されます。『博物館だより 76号』でも紹介しましたが、お天王さんは牛頭天王を祀り夏の悪病退散・無病息災を願う行事で、市内の大多数は神輿を担いで町内を練り歩くスタイルです。かつての宿場だった吉原で行われる市内最大規模の祭典「吉原祇園祭」もお天王さんの一つです。ここで古くから担がれる神輿の一つが、安政5年(1858)10月に造られたことが分かっています。実は、安政5年に長崎でコレラが発生し、7月には吉原宿でもコレラが流行し、多くの人が亡くなっています。つまり、コレラを鎮めるために天王神輿を造って祭りを行ったものが年中行事化し、次第に市内全域に広がったと考えることができるのです。

さて、以上のような祈りや祓いを目的とした伝承は、科学だけでは満たされない安らぎを得る手段として、古くから日本の文化に根付いてきたと思います。病気の蔓延という生死に関わる事態に対し、社会的安息を担う意味で、今回のコロナ禍は、こうしたものを改めて認識するきっかけになったと思います。そして、密を避けるために約二年間中止された各地の伝統行事を、ここでやめてしまうことなく、再び地域で継承され、コロナ禍の記憶とともに後世に伝えていくことを、心より願います。

(秋山裕貴)

展示室②「富士山の玉手箱」

洋画家野田好子 望郷の富士

（展示期間：令和３年９月４日～１１月１４日）

朝霧高原

大正 14 年 (1925) 富士郡田子浦村に生まれ、富士の麓で育った洋画家野田好子が描く富士山 12 点を紹介いたします。

展示室②「富士山の玉手箱」に新設！
武田弘（たけだひろし）氏寄贈　富士山コレクションコーナー

令和元年（2019）7月、広島市在住の武田弘さんから、60年以上の歳月をかけて収集された自身の富士山関係のコレクションを当館へ一括寄贈したいとのお話をいただきました。

このコーナーでは、寄贈者武田弘さんのご紹介をはじめ、膨大なコレクションのなかから、定期的に資料を入れ替えつつ、陶磁器、工芸品、絵画、くらしの品々などをご紹介します。

富士山かぐや姫ミュージアムの新しい目玉となる収蔵品にご注目いただけますと幸いです。

令和３年度「かやぶき農家の工芸まつり」実施報告
（期間：令和３年５月１６日～６月１３日）

利用団体の活動や作品紹介を通して本館の活動や本市の工芸に親しんでいただくことを目的に、バラの開花時期にあわせて開催しました。例年より早い梅雨入りでしたが、会場の県指定有形文化財旧稲垣家住宅では、週替わりで型染、陶芸、木彫、和紙工芸、竹工芸の展示や販売、体験を行い、1,573人という多くの方々に御来場いただきました。かやぶきの古民家という癒しの空間の中で、身近な工芸作品にふれていただくことができ、来場者をはじめ参加団体からも好評でした。

新寄贈品紹介　西ヶ谷広和（にしがやひろかず）氏寄贈富士山写真

緑の風

元日の港

路傍に咲く

色づく

令和３年３月、駿河郷土史研究会の会員である西ヶ谷広和さんから、ご自身が撮影した富士山の写真を多数ご寄贈いただきました。西ヶ谷さんは、18歳で初めてカメラを購入し、49歳から本格的に撮影を行い、約35年のキャリアをお持ちです。その間、富士山百景写真コンテストのグランプリ等、多くの賞を受賞されています。今回紹介した４枚の写真以外にもすてきな写真がたくさんあります。それらについては改めて紹介させていただきます。お楽しみに。

富士山かぐや姫ミュージアム　赫夜－かぐや－　博物館だよりNo.78

発行年月日　令和3(2021)年８月31日
編集・発行　富士山かぐや姫ミュージアム
Mt.Fuji and Princess Kaguya Museum
印刷　株式会社　文光堂
住所・連絡先　〒417-0061　静岡県富士市伝法（でんぽう）66-2　TEL.0545-21-3380　FAX.0545-21-3398
HP. https://museum.city.fuji.shizuoka.jp/　E-mail. museum@div.city.fuji.shizuoka.jp
開館時間　４月～10月　9:00～17:00　11月～３月　9:00～16:30
休館日　月曜日（祝日の場合は開館）、祝日の翌日、12/29～1/3（年末年始）
歴史民俗資料館（分館）　開館時間・休館日は本館に同じ
博物館屋外展示（ふるさと村）　休館日なし　観覧料　すべて無料

ふじかぐちゃん

タイトルの「赫夜－かぐや－」は、富士山のかぐや姫物語を今日に伝える「富士山大縁起（ふじさんだいえんぎ）」（当館蔵）に登場する「赫夜姫（かぐやひめ）」からとっています。

このリーフレットは、植物油インクを使用しております。